

パーソナル・ナラティブから捉える「健康」の可能性

－ Salutogenesis の観点から －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
臨床心理学領域
麻生 祐貴

近年、Salutogenesis（健康生成論）の中核概念：Sense Of Coherence（首尾一貫感覚）に関する研究が盛んに行われている。しかし、健康を数量化することで実証を試みる方法は、健康を絶対的なものとして捉え、人間を健康に対して受動的な存在として規定する印象を受ける。本研究は、疾病生成論的な健康の捉え方を健康生成論的な観点から再考し、健康概念の深化を試み、包括的な人間理解の可能性を示すことを目的とした。15年前に舌癌を発症し、後遺症を負った64歳のある女性に質問紙とインタビューへの回答を依頼し、健康生成論が質的に根拠づけられるかを検討するとともに、新たな知識の生成を試みた。さらに、構成概念をより「質の高い仮説」に導くことを目指した。結果、本事例において健康生成論は根拠づけられ、ストレスの理解と対処を信頼できる他者や自然の流れに【託す】、病を【書き換える】等のストレス対処の戦略を見出すことができた。また、彼女に一貫していたのは、確固とした自己感覚と主体性を基盤にした世界との関係、関わり方の感覚であり、その上には【変わらないために変わる】という健康生成の方法が実践される可能性が示唆された。本論から明らかになったことは、「健康」は数値化する試みにより一般化するだけでは捉えられないということである。パーソナル・ナラティブに焦点づけることで、SOC仮説において、概念が内包する意味と新たな仮説を導き出せたことが本論の成果である。